

鴨川の夏

佐藤 章二

幸治は敗戦の衝撃で世の中ofすべてが無意味で何の価値も感じられなくなっていた。虚しかった。こんな経験は生まれて初めてだったので、これはどういうことだろうというろたえ、なんとかしてこんな憂鬱な気分から脱け出したいと絶えず懊悩していた。すでに大学の四年生にまでなっていたのだが未だに勉強さえ全然手につかなかった。

その年の初冬、祖母の一周忌の法要を営んだ。親たちは一日中そのことで明け暮れ、幸治でさえ知らん顔をしているわけにはいかなかった。夜になってようやく静かになり、彼は母家の薄暗い電灯の下で火鉢に寄りかかって、ぼんやりと煙草を吸っていた。母家は早く死んだ祖父が明治の頃に建てたもののように家中黒く煤けて傾いていた。祖母の話では、夜になると連子窓に狐が外から手を掛けて覗き込んでいたという。彼は、その祖母の幽霊を西棟の部屋で見たことを思い出していた。

その時、隣の土間から、「幸ちゃん、何してるの」と言いなながら、若い叔母が近づいてきて火鉢の向こう側に座っ

た。香水の甘い匂いが漂う。父方の叔母で、彼は初対面だった。仏教系の短大の出身だと聞いていた。「いえ、何もしていませんよ」と無愛想に答える。「幸ちゃんは何の勉強してるの」「国漢科です」「あら、私もそうなんですけど、おもしろいでしょう」「やればおもしろいのかも知れないですがね」「…」「やる気にならないんですよ」「どうしてかしらね」「自分でも分からないですよ」「卒業したら何になるつもり」「何になったらいいんでしょうね。そんなこと考えたこともないんです」「毎日が虚しいんですよ。どうしたらいいんでしょうか」「叔母もそれには何も答えず、黙り込んでしまった。しばらくして「今夜は泊まらせていただくわ」と言って座を立った。幸治は火の消えた火鉢の底をぼんやりと見つめていたが、この間見た幽霊が叔母の部屋に出ないといいがとひそかに心配になるのだった。

次の年の夏、幸治は叔母の紹介で、ある宗派の大学の教授にしぶしぶ会いに出かけた。彼女は教授が主催している講話をしばしば聴講しているらしかった。

幸治は大きな座卓を挟んで教授の前に座っていた。二階の書斎で、開け放された窓から鴨川の堤防が見え、緑の草の上に午後の暑い日差しが照りつけていた。流れは見えないが川音がかすかに聞こえてきた。教授はほっそりとした体つきで、やや小さな顔に度の強そうな眼鏡をかけて

いた。細かい柄の白地の浴衣を着て兵児帯を巻いていた。差し出した叔母の紹介状を静かに読んでいた。やがて顔をあげて、経歴や今何をしているのかというようなことを尋ねた。幸治が答えるのを聞きながら聞いていたが、そのうち小さな声で念仏を唱え始めた。その声が次第に大きくなってくる。この宗派の人は念仏を重視するとは聞いていたが、対談しながら唱えるとは。書斎にも扇風機はなかった。幸治は滲んでくる汗を額に感じながら、ただ黙って念仏を聞いていた。

やがて教授は「その辺を少し散歩しましょうか」と言って立ち上がった。堤防の上に出る。日差しは焼けつくように暑い。川幅はかなり広いが流れは浅く、大小の岩を噛んで音を立てていた。教授はあちらこちらと仏閣を説明してくれながら歩く。しかし、その間も念仏を唱えることを止めなかった。低いその声が川の流れに混じって聞こえる。堤防を下りてさらに暑いアスファルトの街中に出る。雑踏とはいえないがそれなりに人通りはある。念仏を唱えながら教授は歩く。幸治も仕方なく半歩下がって並んで歩く。だが不思議なことにこの珍妙な二人を振り返る男女は誰もいない。珍しくないのであろうか。

さらに歩くと、氷と染め抜いた赤い幟が風に揺れていた。「氷でも食べましょうか」と言つて暖簾をくぐった。狭い店の中は日焼けした街の男女で一杯である。氷をかく音が

涼しげに響く。向き合って座った教授も山盛りの黄色い欠氷を食べているのであるが、なおも声高にナンマイダーを唱えることを止めない。「店中の人たちにも聞こえている」と思うと幸治は恥ずかしく身の縮まる気がして欠氷も喉をとおらない。「念仏なんて何の意味がある」と思うのであるが、それを口に出すことは遂にできなかった。

店を出てそこで別れた。立ち去っていく教授の後ろ姿から低い念仏の音が聞こえてくるようにも思えた。幸治は一人歩道を歩きながら溶けていくような解放感を味わった。欠氷屋の教授を思い出すと滑稽でさえあった。しかし、道中立ち寄った古本屋で、金子大栄校訂の『歎異抄』が偶然目に入ると、何となくそれを買ってしまったのだ。

それ以来すでに半世紀以上たつ。叔母はとうに死んだし、教授とは二度とお目にかかったことがない。幸治は今でも信仰とは縁が遠いようである。しかし、時には深夜怖い夢に襲われて目の覚めることがある。宇宙からお前を突き落とすという魔性の声を聞いたりする。夢だと分かっても一度眠りたいと願う。子供の頃には「羊が一匹」と数えたものであるが、いつの頃からか鴨川のざわめきを思い出しながら「ナンマイダーブツ」と唱えるように変わっている。その方がなぜか寝つき易いような気がするのである。